
ギャング.

黒羽 7 3

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギャング・

【Nコード】

N2201T

【作者名】

黒羽73

【あらすじ】

「私の娘を殺してほしい」一流企業の社長から放たれた言葉。殺し屋『狗』こと狗賀健はその一風変わった依頼を受け、無色透明な少女に出会う。少女を一週間後に殺す。そのことを頭の隅に置きながら、狗と少女の二人はカップルの真似事を始めるのだった。

元・殺し屋の女が経営する喫茶店『鴉の波止場』。その喫茶店を中心に個性的な殺し屋たちが色々する話。（キャスフィの小説投稿板で書いていたものを改訂しつつ、こちらに載せます）

0・喫茶『鴉の波止場』

それは 人が獣に成り下がった世界。

獣のように、

金を貪り 女を喰らい 力を奮う

ギャングの溜まり場、と聞いて思い浮かべる場所はどこだろう。

非合法的なクスリが売買されるような危ない場所だろうか。マフィアのボスがいるような立派なオフィスだろうか。カジノのようなお金が飛び交う場所だろうか。ゴミの溜まる薄汚い路地裏だろうか。

それはきつとどれも正しい。 酒とタバコと女の化粧の匂いが漂う場所。

金力。そして、金さえあれば愛だつて簡単に手に入る。ただ、そんなもので手に入れた愛などすぐに壊れてしまう。飽きてしまうものだろう。結局は、金で買われた女も汚い金と快楽を求めているだけのだから。

そんな世界に一度だつて足を踏み入れれば、身体に匂いが付いてしまう。決して洗い落とせるようなものではない匂いが。そして、敏感にも一般人たちはその匂いに気付く。すると、その匂いのついた人間を自然と避け、遠ざけるようになるのだ。これが一般の世界に戻ってこれない理由の一つ。しかし、それよりも理由として強いのが 自分自身がその世界に惹かれてしまったから。

しかし、たまには疲れることもあるだろう。

いつだって気を抜くことのできない世界に、うんざりしてしまうことも。

だからこそ、彼らは「普通」を求めた。金の匂いも、女の色気も、お互いが張り合う空気も、何もかもない場所を。ゆつくりと身と心を落ち着けることのできる場所を。そう思った時にふと訪れたのが、とある喫茶店だった。

昼間は喫茶店、夜はバーへと変貌する何の変哲もない小さな店。しかし、不思議なことで。ここでもやはり一般人は誰一人として立ち寄ろうとしないのだ。

店内に流れる静かな音楽。窓際に置かれた観賞用植物は午後の日差しを浴び、店内の音楽など興味ないかのように窓の方を向いている。

置かれた丸テーブルやイスは上品で落ち着いた雰囲気醸し出しており、それらは完全に店の風景の一部と化していた。テーブル席が四つ、カウンター席が六つ。この数から分かるように、店はそれほど大きくない。小ぢんまりとしていて、一人で読書に没頭するにはもってこいの場所である。

店内は独特なムードを作り出しており、店の外と中を完全に遮断していた。まるで世界が違うのだ。街のゴロツキ共がこの店に入ってきたとしたら、ころつと態度を変えて酒より先に紅茶や珈琲といった代物を頼むに違いなかった。例えばそんな事実がないとしても、この店にはそう思わせる何かがある。

カウンターの裏で一人、グラスを拭くこの店のマスター。

女性にしては背が高く、鼻筋がすつと整った顔立ち。鋭利な刃物のような目。手入れの行き届いていない長い黒髪を誤魔化すかのように、後ろで一つにまとめて垂らしている。黒いハイネックの上に白いエプロンを付けていたが、不思議とその人には似合っていないかった。戦場で軍人がエプロンを付けているかのようなミスマッチさ

だった。

彼女はふと手を止め、柱に掛っている時計に目をやる。針は二時を指そうとしているところだった。それを確認すると、拭いていたグラスをカウンターに置く。

直後、店内にドアベルの音が心地良く鳴り響いた。入ってきたのは男女の二人組。背の低い青年と、背の高い女性だ。見るからにカップルという感じではない。彼らは迷うことなくテーブル席につくと、青年の方がマスターに笑顔を向けた。

「いつものね」

彼らはこの店の常連なのだ。毎日といっていいほど顔を合わせていると、店員と客という関係よりも親密なものに思えてくる。実際、お互いを名前で呼び合っているような仲なのだが。

青年の名前は狗賀健^{くがけん}。その名前が本名かどうかなど、彼らの間では些細な問題だ。

彼は自らの低身長にコンプレックスを持っている。それに加え童顔であったため、実年齢よりはるか下に見られることが多々あった。年下にですらなめられるので、最近は色付きのサングラスやゴーグルで目元を隠している。髪を茶色に染めたりパーマをかけたり、耳にはピアスの穴をあけたり、と彼の少しでも自分のことを強く見せようという努力が垣間見える。

極めつけは手の甲の刺青。健の左手の甲には黒い犬の刺青が彫られていた。大抵の者は、その刺青を見て彼に喧嘩を売ることを止め命拾いをしていた。

だが、普段の半袖にハーフパンツといった恰好をどうにかしないことには、いつまで経っても子供に見られるのでは……とマスターは考えていた。それこそ、子供が恰好をつけて背伸びをしているようにしか見えない。もちろん、マスターがそれを口に出すことはなかったが。

女性の方の名前は小金草紺^{こがねぐさ こん}。こちらも同様に、本名かどうかなどどうでもいい問題である。

彼女は健とは逆に驚くほど背が高い。女性の平均身長はおるか、男性の平均身長すらも遙かに上回っている。それに加えスマートで、出るところは出ている。人工的な金髪は腰まで伸びており、歩くたびに揺れる様は美しいの一言に限る。女性が羨ましがる体系そのものだ。

男が群がりそうなものだが、不思議なことに彼女の周りに漂うオーラが男を寄せ付けない要素をしているらしい。彼女の表情にはどこか、人を寄せ付けないクールなものがある。

マスターは彼女が黒色の服しか着ないのを残念に思っていた。紺ほどの端麗ならば、どんな恰好でも似合うだろうに。黒いコートの中也黒い服。黒の長ズボン。というガードの高い服装。そして、当然のようにハイヒールまでも黒かった。

「はい、ブラックコーヒーとホットミルクね」

そして、紺は飲むものまで黒い。健は子供っぽい。

「サンキュー、鴉さん」

健はお礼を言ってカップを受け取り、紺は無言で受け取った。

そして当然のことながら『鴉さん』とは、マスターのことである。烏原鴉^{うはり からす}が彼女の名前だ。喫茶店名である『鴉の波止場^{はじば}』も、彼女の名前にちなんで付けたものだった。

「今日はあの二人いないの？」

ホットミルクの入ったカップを両手で包み込むように持ち、健が言う。視線はカップに落としたままだ。

「二人はお仕事中。もうすぐ帰ってくるだろう」

「……本業の方……の？」

鴉の答えに紺が呟くように聞いた。独り言かと思って聞き逃して

しまつほど小さな声だった。彼女は長い会話することが苦手で、言葉の所々に息継ぎを入れないと喋ることが出来ない。

鴉は、紺の問いに頷きを返した。

彼らが言う『二人』とは、この店で働いているウェイターとウェイトレスのことだ。しかし先ほどの会話の通り、二人は本業を持っている。定期的な仕事ではないため、この喫茶店で働くことを副業としているのだ。実を言うと喫茶店で働いている時間の方が長いのだが、二人がこちらの方を副業だという限りこちらが副業なのだ。仕事は時間ではない。

「そうか、儲かってるんだな」

「儲かっているかどうかは別として、こつちの世界じゃ売れっ子路線だろう」

鴉は暇そうにカウンター席に座り、健と世間話を始める。すでに鴉の接客口調は崩れていた。紺が口を開こうとした瞬間、再び店内にドアベルの音が心地良く鳴り響いた。

その音と共に入ってきたのは、先ほど話に出ていたウェイターとウェイトレスの二人。

「マスター、お待ちかねー。伊雲春いぐもはるの登場だー」

気の抜けたような口調で喋る中肉中背の青年、伊雲春。特徴的な薄いオレンジの髪。まつ毛が異様に長く、目だけ見れば女性のようにも思える。いつも口元に笑みを浮かべているせいか、不気味に見えることもたびたびあった。

「高岸麗たかぎしれい、ただいま帰りました。すぐにお手伝いを致します」

口調こそ丁寧だが、声の温度は人の神経を逆なでするほど冷たい。この娘が高岸麗。少女……と言っても良いほど小柄だが、歴れっきとした成人女性だ。街にいたら目を引くような長い銀髪。丸く大きな夢見るような瞳も薄い銀色をしている。この髪や目は天然のものであるらしい。

「おかえり。さつさと着替えておいで」

鴉が優しく声をかけると、二人は軽くお辞儀をして店の奥へと入って行った。

「……人を殺しているような人に、淹れてもらう珈琲は……ないわ」

紺の突然の言葉に、二人は目を丸くする。しかし、すぐに気を取り直した。彼女の冗談は分かりにくい。

「紺が皮肉か、珍しい」

「それだと、オレも駄目ってことじゃん」

健が苦笑をこぼし、鴉がけけらと笑った。当の本人はそんなことを言っておきながら、ゆったりとブラックコーヒーを飲んでいる。紺の言葉には感情の起伏が少ないため、冗談でもドキツとする発言がいくつもあった。

鴉はニヤニヤ笑いながら、紺に向かって意地悪く言う。

「オレだって人殺しの為に淹れる珈琲なんかないぜ」

「あら……、そんなことしたら商売あがったり……じゃないかしら？」

「言うねえ」

鴉は楽しげに笑う。

「しかし、オレが殺し屋だったのも過去の話。もう引退したよ、そんな危ない職業。今はここでこうやって若い者の働きを見るだけで十分」

「鴉さん、まだそんな年じゃないでしょう」

健の言葉には答えず、鴉は肩をすくめた。

鴉がその職を辞めた当時は、もう二度とこんな世界に関わるものか。と思っていたものだ。残り余るほどある余生を静かに喫茶店を開いて過ごすんだ、と夢も抱いていた。

しかし、いざ店を開いてみると普通の客は一人も来ない。

誰かがそう言ったわけじゃない、自分がその世界に関わっていた事実を抹消したはずなのに。一般人は絶対に足を踏み入れようとはせず、危ない世界の人間がよく出入りした。客は一目で危険な人物だと分かる服装をしていたわけじゃない。確かに自己主張の大きい奴が多かったので、個性的な者がほとんどだったが。

では何故、鴉が彼らを一般人ではないと思ったのか。ただの勘である。根拠もない、頼りにもならないそんな感覚で鴉は確信していた。それならば客の方はどうだろう。もし本当にそんな世界の住人ならば、彼らは鴉と同じように勘で彼女が一般人ではないことを見破ったのではないだろうか。

それに気付いた時、鴉は諦めをつけた。

一度その世界に足を踏み入れた身、もう普通の生活をしたいなどと思わない。

それからというもの、鴉は積極的に以前のコネを利用した。それによって店で働くことになったのが、春と麗だ。もうここまでくれば分かると思うが、この二人は殺し屋。そして、客である健と紺も同職だ。

こんな小さな空間に殺し屋なんていう物騒な人種が元を含めて五人もいる、身の毛がよだつ話だ。

しかし、本人たちは平々凡々。この喫茶店は平和そのものだった。

1・冥界の番犬

狗賀健はこの世界において『狗^{いぬ}』という通称で呼ばれている。依頼主の指定した場所、時間、殺害方法をきつちりとこなす。“犬のようになんでもいう事を聞く”ということから、この名前で呼ばれるようになった。

漢字表記が『犬』ではなく『狗』になっているのは、そっちの方が恰好良く見えるから、といった単純な理由であった。

洋式の三階建ての屋敷。屋敷よりも広い庭の面積。庭には壮大な芝生と色鮮やかな花壇が広がっている。使用人たちが忙しくする様子が、狗のいる二階の窓からもよく見えた。

狗はこの国にこんな屋敷があるなんて驚きだ、と呆れに似た感激を味わっていた。

狗が案内されたこの部屋も、彼には考えられないほど贅沢な一部屋だった。座り心地の良さそうなシックなソファ。その前にある透明なガラステーブル。テーブルの上には花柄の紅茶のカップが置かれている。紅茶は先ほど、屋敷の使用人が持ってきたものだった。床には裸足で歩きたくなるほどフワフワした白いカーペットが敷かれている。

こんな部屋に案内されて落ち着いていられるわけがない。狗は底辺も底辺、どん底の人生を歩んできているのだから。彼はこれからずっとこの屋敷に毎日住んでも良い、といわれても断る自信があった。

早くこんな所から出たいが、そうもいかない。ここには仕事のために来たのだ。仕事といっても殺しをしに来たわけではない。依頼主に話を伺いに来たのだ。

「お待たせしました」

部屋のドアが開き、この屋敷の所有者夫婦が入ってきた。背筋のしっかりした中年男性。あまり肉付きの良くない痩せ形で、頬はこけている。更に、髪も薄くなりかかっていた。

奥さんの方は少しぽっちゃりとした中年女性だ。化粧はあまりしていないようで、素の顔立ちが整っていると見える。

二人は迷わずソファに座り、狗にも腰掛けるように言う。

「どうぞ、お座りください」

口の先まで出かかった断りの言葉を飲み込むと、狗はしぶしぶといった様子で夫婦の向かい側のソファに腰掛けた。こんな綺麗な家具に自分なんか触って良いのだろうか、という遠慮と、自分の性に合わない。という二つの気持ちが入り混じっている。

狗は無遠慮に依頼主夫婦の観察を始める。こんな屋敷に住んでいるというのに、どちらも飾り気のない質素な服装。それは好感よりも先に、この家族の事情を垣間見たような気にさせた。

居心地の悪い沈黙が数秒間流れたので、狗が咳払いをし依頼主に話を促す。

「では、ご依頼の件を」

夫婦は互いの顔を見合わせ、決心を固めたかのように頷き合う。

主人は狗と目をしっかり合わせ、固く結ばれた口を開いた。

「私の娘を殺してほしい」

指定時間の朝早くにそこに来たのは、十代の娘だった。健は背を預けていた壁から離れ、その娘に近づく。

場所は依頼主が経営している会社の前。都会で朝ということもあ

つてか、通勤してくるサラリーマンも多い。黒い人の波に浮かぶ白一点。白いワンピースに、その小さな頭には大き過ぎる白い帽子。色素の薄い茶色い髪が肩の横で揺れている。

質素というよりは、透明　そんな言葉が似合う。どんな色に染められこともない、そしてこれからも染められない純真無垢で無色透明な女の子。

「あら、あなたが『狗』さん？」

そばまで来た健に対し、娘はにこりと微笑む。病的なまでに白い肌　いや、この子は本当に病を患っているんだったか。健は息を吐き出し、娘に鋭く言う。

「狗賀健だ」

「くが？　変わったお名前ね。浦木真希ういきまきです、これから一週間よろしく」

浦木真希　彼女こそが今回のターゲット。

疑いを知らない眼差しに射とめられ、健は息を詰まらせる。これほどまでに純粋な子は見たことがなかった。外界を知らずに育つ、それがこれほどまで影響するとは。　自分にはもったいない。

「さっそくだが、随分と目立つ恰好をしているな」

「外出なんて滅多にしないから、服はこれしか持っていないの」

あんな金持ちの娘が、服をワンピース一枚しか持っていない。その事実を受け止めるまでに健の頭は少し時間を要した。真希はそんな健の心情を知らず、無邪気にはしゃぐ。

「あ、じゃあ、買い物に付き合ってよ。私も女の子らしく、服選びとかしてみたいな」。良い社会勉強にもなると思うし」

その勉強が役立つ時が来るのか。健の微妙な表情の変化にも、真希はもちろん気付かない。

健がその場から動かないでいると、真希は子供らしく頬を膨らませ、彼の服の裾をつかんで引っ張った。

「買い物ぐらい付き合ってやるから、引っ張るな」

「わー、本当？ デートみたいね」

「何言つてんだ。デートだろ」

健の平然とした物言いに真希はくすくすと笑いを洩らす。

デートならこうしないとね、と真希は漫画で仕入れた知識に従い、健と腕を組む。周りの者たちは、さも羨ましげにその二人を見たことだろう。彼らは傍から見ればカップルそのものだったのだから。

腕を組み並んで歩くその姿に、捕食者と被食者を投影する者がはたしているだろうか？

狗が今回受けた依頼は、これまでのものとは一風変わったものだった。

時間指定は狗が真希と出会ってから一週間後。場所指定はビジネスホテル。殺害方法は 真希と一週間、カップルの真似事をしてから彼女自身に託す。ターゲットである浦木真希自身に死に方を決めさせるのだ。

そして、彼女はそのことを知っている。

真希は生まれながらにして病弱な身体を持っていた。その命が二十代で終わることは家族全員が察していた。彼女自身も、仕方のないことだと諦めていた。

しかし、心残りがあったのだ。今まで病院と家、どっちに住んでいるのか分からなくなるほど入退院を繰り返してきた彼女。当然、十代の女の子がする普通の生活など送ってきていない。

最後に、恋愛ぐらいしておきたいな。

そんな彼女の一言が、今回のことの発端だった。

娘の願いをなんとか叶えてあげよう、と彼女の両親が殺し屋に依頼をしてきたのだ。

何故わざわざ殺し屋なんかにと、思うが、それも彼女の望みの一つだ。いつ死ぬか分からない恐怖におびえるぐらいなら、死ぬ間際に思いっきり遊んで、その後にぱったりと逝ってしまいたい。一気にかたを付けてほしい。

狗は今までは違った趣向に戸惑ったものの、結果的にこの依頼を受けた。

依頼主である真希の父は「真希を楽しませる」ことだけを強く言われた。その後の始末に関しては彼女自身に決めさせろ、と。ターゲットの死よりも、その過程にひどく固執した依頼。

彼女が楽しんだかどうかなど、死んだあとになれば聞くことも出来ない。はつきり言って、このカップルごっこは適当にやってもよかったのだ。だが、狗はしっかりと依頼主の願い もとい、真希の願いを聞き届けることにした。

彼女のつまらない人生の最後に自分が関わったことによって、真希の死に際の思いが変わればいい、と思いつながら。

「もう疲れちゃったのー？」

「……………」

健は返す言葉も見つからない。真希は思った以上に体力があった。いや、体力ではなく気力か。

あの後、都内のデパートをいくつか巡ったものの彼女の気に入る店はなく、今は休息をかねてデパート内の喫茶店に入っていた。健が通っている喫茶『鴉の波止場』とは違い、多くの人が入り出していた。

真希はオレンジジュースをストローですすりながら、上目づかいで店内をきよろきよろと見ている。よほど珍しいのか、その目はまんまるだった。更にはきらきらと目を輝かせているようにも見える。

健も一応カフェ・オレを頼んだものの、全く口をつけていない。

「あんまり運動すると寿命が縮むぞ」

「うーん、それは怖いわね」

健の皮肉を真希は軽く受け流す。そして、ふと思い出したかのようにつけ足す。

「でも、最後まで思いっきり身体を動かしておかないと損だよねえ」

彼女はしきりに『最後』という言葉強調する。今度は健の方が受け流す番だった。健にとっては聞きなれた台詞だ。

彼の同業者はいつだって死と隣り合わせだ。それは狗だって変わらない。

どんな時でも『最後』がついて回る。これに先程の考え、“最後くらいハメを外しても良いじゃない”という考えが結びつくと、かなり人格が壊れた人間になる。殺し屋に気狂いが多い理由の一つだろう。

簡単に言いかえると、“いつだって最後だから、常にハメを外しておくぜ”となる。いい迷惑だ。

そんなことを考えているうちに真希はジュースを飲み終えたらしく、退屈そうに足をばたつかせている。そして唐突に、あっ、と片手をあげた。生徒が先生に対して手を上げるときのように。

そして案の定、

「質問！」

と、笑顔で言われた。

仕方ないので健も「どうぞ」と応じる。

「健くんは人に言えないお仕事をしている訳だけど、最近はどうなお仕事をしたのー？」

「んなもん、人に言えないお仕事に決まってるじゃないか」

「あー、企業秘密というやつですか。いいじゃん、教えてよ。きみ

は殺し屋にしては変わっているんでしょう？」

さすがに最後の方は音量を下げていたものの、健は一瞬にして余裕を焦りへと表情を変えた。その変化が面白かったのか、真希は「きゃー」と小さな歓声を上げる。更には、健の反応をもつと見るためか、その危険な単語を連呼するかのように口を開きかける。健はそれを制止するために声を上げる。

「こんな場所でその話を持ち出す奴がいるか」

「ごめんなさいね、世間知らずなもので」

てへ、と真希は舌を出す。……可愛く、ないこともない。

一流の殺し屋が一介の小娘に良いように翻弄されているわけだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2201t/>

ギャング .

2011年5月19日16時40分発行